

縄文時代の漁労

縄文時代の人々は、海へ丸木舟に乗って出かけ、鹿の骨や角で作ったヤスや釣針、土器片や石の錘をつけた網などを使って漁をしていました。日本では、世界最古となる約2万3千年前(後期旧石器時代)の釣針が、沖縄県サキタリ洞遺跡から出土しています。そして縄文時代には、すでに高度に漁労が発達していたと言われています。

霞ヶ浦は、縄文時代のころ、鬼怒川や小貝川の流域一帯を含め、「古鬼怒湾」と呼ばれる一つの大きな内湾となっていました。周辺には多くの貝塚が分布し、出土する漁具や魚貝類から、豊富な水産資源を獲得してきたことがわかっていきます。

まず代表的な漁具としては、釣針があります。後期旧石器時代以降、材質の変化はあるものの、形をほぼ変えずに現代まで使用されている道具のひとつです。縄文時代においてはマグロやカツオ、マダイなど、外洋性の大型魚類を捕獲していたと考えられ、鹿の角が多用されています。上高津貝塚では出土例がなく、霞ヶ浦周辺の貝塚においても、数は限られています。

次に、魚を刺す・突くことによって捕獲する道具として刺突具があります。刺突具にはいろいろな種類があり、ヤスや銚、鏃などがあります。

ヤスとは、霞ヶ浦周辺の貝塚で多く出土する、両端が尖った棒状の道具です。カエシがつくこともあります。主に鹿の手足骨や中足骨を加工して作られています。骨の端部を除去し、縦に四分割して、両端を研磨して作り出します。これを柄に固定し、近くの獲物を突いて捕獲します。

銚とは、銚頭と柄、縄からなり、縄を結びつけた銚頭が柄につけられた道具です。これを投げて、獲物に刺さると、銚頭が柄から外れて獲物の体内にとどまり、その後縄を手繰り寄せて捕獲します。主に外洋において、海棲哺乳類や大型魚類を捕獲していたと考えられます。銚は霞ヶ浦周辺の貝塚では、出土例が少ないです。

ほかに、網漁に使われる錘があります。土器片を再利用し、上下に刻みを入れたもの(土器片錘)や、土や石でできたものがあります。ただ、網そのものは植物性のため腐敗してほとんど残っていません。霞ヶ浦周辺の縄文時代中期の貝塚では、土器片錘が多量に出土します。

縄文時代後晩期の上高津貝塚で出土する漁具の多くはヤスです。銚頭の出土はまれですが、多数のカエシがついたものもあります。出土した魚類は、ハゼ科やコイ科、ウナギ、スズキ属、クロダイ属、カタクチイワシが多く、淡水・汽水域を中心に、内湾奥部浅海域も含め、漁場になっていたと考えられます。

このように、縄文時代後晩期、内湾奥部では主にヤスを使った刺突漁や網漁が中心に行われていたと考えられます。

霞ヶ浦周辺の貝塚から出土した漁具については、第25回企画展「海へー内湾と外洋の漁労」にて展示しています。ぜひご覧ください。

☎ 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(☎ 826・7111)



上高津貝塚出土ヤス・銚頭(個人蔵)



復元したヤスと網(常設展示)